

関西大学教育推進部は、伊丹市教育委員会のご協力のもと、大学間連携共同教育推進事業「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」(以下、本取組と表記)の高大連携事業および広報活動の一環として、「考動力」作文コンテストを開催しました。第2回となりました今年度は、昨年度より大幅に応募数が増え、高校生の部と大学生の部を合わせて1,203作品の応募がありました。応募作品の内訳は、高校生の部1,070作品(小論文部門702、ショートショート部門368)、大学生の部133作品(小論文部門127、ショートショート部門6)でした。多数のご応募ありがとうございました。応募者ならびに関係各位に厚く御礼申し上げます。

ご応募いただいた作品の審査は、本取組企画運営部会メンバーとライティングラボTA、さらに、教育開発支援センター(CTL)の田中俊也センター長、神戸市立工業高等専門学校講師でありCTL研究員でもある林田定男氏、同研究員の佐々木知彦氏、の合計37名で行いました。結果として、高校生の部では小論文部門で優秀賞2作品、ショートショート部門で最優秀賞1作品、優秀賞2作品をそれぞれ選出するに至りました。

小論文部門は、「A群:家族、学校、世界」と「B群:つながり、伝統、仕事」の語群から、それぞれ1つを選んでタイトルを作成する、という課題でした。一方、ショートショート部門は、テーマを設けず自由に作成してもらいました。

入賞作品を見てみますと、両部門ともに家族、スマートフォン、学校などをテーマに選んだものが多く、高校生のみならずにとっても身近なものが文章を書く題材として選ばれやすかったと言えるでしょう。

以下、部門ごとの講評を述べます。

【小論文部門講評】

小論文部門では、本コンテストが求める小論文を、「自分の意見を述べ、なぜそう言えるのかという理由を筋道立てて説明し、読み手を説得させる文章」と定義しました。この定義をもとに、「全体の構成」「論証の方法」「自分の立場・意見」「日本語の表現」の4つの観点から審査を行いました。これらの観点の中で、今回の審査のポイントとなったのは「論証の方法」です。「論証の方法」は、主張の裏づけ(具体例や理由の提示)として、信頼性のある資料を用いているかどうかを評価する観点でした。自分の意見を読み手に納得してもらうためには、客観的な根拠を示すことが必要です。

小論文部門

優秀賞

「人と人とのつながりが薄れている世界」

天野愛子さん(関西大学第一高校2年)

「世界の国々の消費税における国家と国民のつながり」

小野瑞季さん(関西大学第一高校2年)

第1次・第2次選考では、主張の根拠が主観的なものにとどまっていないかを中心に評価しました。すなわち、自分の体験や考えのみではなく、テーマにかんする資料を調べてそれに基づいた記述があるかを重視しました。

その際に、重要な問題となったのが「剽窃(ひょうせつ)」です。何かの資料(本や雑誌、インターネット上に載っている文章やデータ)を引用する際には、本文中に引用であることがわかるように明記すること、および、文章の最後に引用した文献の情報を一覧できるリストを載せることが必須です。しかし、残念ながら、受賞作品を含めて今回ほとんどの応募作品でその点が達成できておりませんでした。この出典の明示がされていなかったという点が、今年度のコンテストにおいて、小論文部門で最優秀賞を選出しなかった理由の1つとして挙げられます。今後、みなさんが小論文を書かれる際にはぜひとも留意していただきたいと審査員一同願っております。

それでは、入賞作品をみてみましょう。

優秀賞の天野さんの作品は、「全体の構成」を高く評価しました。スマートフォンが普及している社会背景に基づき、その使用における問題点を挙げ、最後にインターネットと共存した人のつながりについて提言されています。文章全体の流れとしてはよいものでした。その反面、スマートフォンの使用の問題点が、自分の経験に基づく指摘であったことは残念でした。着眼点は身近なところであってよいのですが、それを手掛かりと

してさまざまな他者の意見に触れ、最終的に何を言いたいのかをまとめられるとよいのではないのでしょうか。他者の意見を引用することで、より客観性のある問題点の指摘が可能になります。さらに、問題点における改善策をもう少し具体的に提示できると、議論が深まったのではないのでしょうか。

同じく優秀賞の小野さんの作品は、「論証の方法」を高く評価しました。日本の消費税増税という社会背景に基づき、8%という数字の適切さについて論じられました。その際、小野さんは世界各国の消費税についての状況をつぶさに調べ、紹介されていました。いろいろな資料にあたり、よく勉強されたことがうかがえました。しかし、他国と比較して具体的にどのような点が日本に取り入れられるのか、また、どうすれば日本の国民が消費税増税のメリットを感じることが出来るのかについて、踏み込んだ意見が提示できればなおよいものになったのではないのでしょうか。

では、入賞作品と喜びの声、および伊丹市教育委員会よりいただきました各作品に対する講評をご覧ください。



【小論文部門優秀賞】

人と人とのつながりが薄れている世界 関西大学第一高校 2年 天野愛子

今、世界は、急速な発展を遂げている。中でも、インターネットの発展は特に著しい。総務省によると、平成24年の時点で、スマートフォンの世帯保有率は49.5%である。つまり、日本の約半数の家庭にスマートフォンがあるということだ。それだけ、スマートフォンが生活世界を占めているのだ。確かに、私たちの世界を豊かにしてくれている存在ではあるが、その反面、問題はたくさんきまとう。だからこそ、ネットと我々の在り方を考えていかなければならないと私は思う。そこで、私は2つのことについて考えてみることにした。

一つ目は、SNSについてだ。SNSとは、ソーシャルネットワーキングサービスの略称で、人と人とのつながりを促進・サポートするコミュニティ型のWebサイトを指す。端的に言うと、ネット上でのコミュニケーションが簡単にできる便利なツールだ。最も有名なものは、おそらくLINEだろう。総務省によると、平成26年5月の時点で63.5%の高校生が使用しているそうだ。会話や通話を無料で出来たり、グループと呼ばれるものを作り大人数で会話することが出来るといった利点が、半数以上の使用につながっているのではないかと思う。また、LINEによってあまりクラスで話したことのない人と仲良くなれたりクラス内で作ったグループで学校行事の打ち合わせをするといったような使い方をするのも特徴である。このように、クラス内のつながりが深まったりととても良い点がたくさんある。

しかし、LINEを使用していない人の立場はどうだろうか。クラス内のグループ上で、何かを決めるのに参加すること

天野さんの喜びの声

私は、現代での私たちとネットの在り方をテーマとして、この小論文を書きました。私は、つながりはネットだけが全てではないことを理解するのが大事であると主張しましたが、この「喜びの声」を書いている今も、やはりSNSが気になってしまいます。日頃、両親や先生などにスマホに依存し過ぎだと言われても、中々控えることが出来ないといった経験は、多くの高校生がしたことがあるのではないのでしょうか。もちろん、使用をひかえることは大事ですが、まずは依存しているという意識や自覚をもつことから始めるべきだと思います。

このように、小論文を書くことにより、社会問題についてきちんと考える機会を与えて下さり、ありがとうございました。また、このような賞を頂けたことにも感謝します。

ができない。LINEを使用している友人たちの会話についていくことができない。このような問題が起こるのだ。私も、以前はその1人だった。LINEを使用していなかったがために、何とも言い難い疎外感を感じるのだ。そして、LINEを使用していないのは何も悪くないのに、心のどこかで遠慮してしまう。

だからこそ、LINEをはじめSNSを使用している人は、①使用していない人に配慮をすることを忘れない、そして、②情報をきちんと共有する。この二点について注意することが、大切だと思う。

二つ目は、使用頻度についてだ。私たちの身近なところで言えば、電車内でのスマートフォンの使用があげられる。実に、乗客の8割以上がスマートフォンを片手に深妙な顔つきをしているように感じる。街でいわゆる“歩きスマホ”をしている人もよく見かける。スマートフォンは、それほど手放せないものになりつつある。私自身も、その1人であると自覚している。

つい先日、親しい友人と2人で電車に乗っていたときのことである。2人ともカバンの中からスマートフォンを取り出し、それぞれでいじっていた。そのため、2人の会話はほとんどなかった。話し始めたきっかけは、電車を降りるときであった。なんと、電車に乗ってから20分間ほぼ会話をしていなかったのだ。

心を許しあった友人であったのに、これほど会話をしなかったのは初めてのことであった。

これは、人間がネットに支配されすぎているのが原因だと思う。何も気にせず使用していると、気がつけば1時間を過ぎていたという経験は、おそらく私たち高校生の間でよくあるだろう。画面に集中するあまり、周りが気にならない状態に陥ってしまう。私たちの心が、ネットに支配されているのだ。その結果、現実での親しい友人との会話ですら遮断され、ネットの上でのつながりばかりが大きくなっていっていると思う。

先程も述べたように、確かに、スマートフォンをはじめネットは便利なものである。今の世の中、ネットを使用している者からすれば、それなしで生活するなど考えられないほどだろう。だからこそ、使い方を考えて私たち人間と共存していくことが大切だと思う。まずは、つながりはネットだけがすべてではないのを理解すること。そして、上手に向き合い人と人とのつながりを作っていくことこそが、これからのネットと我々の在り方だと私は思う。

伊丹市教育委員会からの講評

「ネットと人間のあり方」についての考えを述べられるにあたり、高校生にとって身近であるスマートフォンの保有率や使用率から始められる文章は、読み手を惹き付けています。本論では、天野さんの具体的な経験を記述され、そのうえで、ネットとのよりよい共存について考えることが必要だと結論づけられており、全体の文章構成はしっかりとしています。

次に、内容については、SNSのなかでも、高校生が多用するLINEに絞り込んだ点、天野さん自身が友人との会話を遮断してネットに没頭してしまうという経験は、ネット社会の一端をリアルに表現するとともに、「人と人とのつながりが薄れている」という天野さんの主張について裏付けがされています。

「LINEがなければ友人とつながれない」「友人と一緒にいても友人とつながらない」この相反する状態の原因がネットによる人間支配だとお考えになるならば、結論部分はもう少し掘り下げた主張があると説得力がさらに増すのではないのでしょうか。

【小論文部門優秀賞】

世界の国々の消費税における 国家と国民のつながり

関西大学第一高校 2年 小野瑞季

今年4月、日本の消費税は5%から8%に引き上げられた。この数字はいったい高いのか、低いのか？ 私は、現代の世界における様々な国の税制度を調べた上で日本の消費税率というのは高いと思った。なぜなら、消費税増税による国民のメリットが少ないと感じたからだ。

まず第一に、なぜ消費税増税をするのかというと財政赤字である政府の税収を増やすためである。少子高齢化が著しく進む日本は、社会保険料など現役世代の負担が年々高まっている。そこで、所得税や法人税を上げてしまうとさらなる負担を現役世代に与えてしまうため、政府は国民全体で負担できる消費税の増税を決めた。しかし、誰にでも同じ8%の税率をかけると所得の少ない人ほど増税の負担が大きくなる。これでは大きな格差と貧困を生んでしまいかねない。

ここで世界に目を向けてみると、多くの国で導入されているのが軽減税率というものだ。軽減税率とは、標準税率より低く抑えられた税率のことで、生活必需品などの生活に不可欠な商品の税率は低くなるというものだ。例えば、イタリアでは21%の消費税に対して、食肉・ハム・小麦粉・薬といったものには10%の軽減税率を適用している。またカナダでは、ドーナツを購入する際5個以下だとその場で食べる「贅沢品」に、6個以上で家に帰って食べる「食料品」となり税率が変わる。フランスでは、普通のチョコと板チョコでの税率が違ったり、ドイツではファーストフード店で買い物

小野さんの喜びの声

今回、このような賞を受賞することができ大変嬉しく、光栄に思っています。私自身、消費税増税というのは初めて経験するもので、普段の自分の生活にどのように影響するのかあまりピンと来ていませんでした。しかし、消費税は学生である私にとって一番身近に感じられる税金です。購入するもの全ての税金が上がるというのは自分にも大きく関わることだと思い、この機会に消費税のことに詳しく調べることにしました。

今回の文章を書く以前、私の消費税増税に対するイメージはあまり良いものとは言えませんでした。しかし、世界の国々の消費税のあり方や、消費税率のかけ方の工夫などを知り、消費税増税が一概に国民の負担になるとは言えないと思いました。

近い将来、私たちの住む日本では更なる消費税の増税が避けられません。今回の文章を通じて、私の消費税に対するイメージが変わったように、国民一人一人が消費税増税に前向きなイメージを持ってほしいと思います。

をする際、店内で食べると標準税率、持ち帰ると軽減税率が適用される。

「生活必需品」と「贅沢品」の線引きは難しいものがあるが、私は軽減税率を導入することで低所得者の負担が軽くなることは間違いないと思う。

そして第二に、消費税率そのものを他国と比べてみると日本の8%というのは極めて低い数字である。ではどうして、世界の中でも消費税率の低い日本で政府が消費税増税を打ち出すと国民の反発が大きくなるのだろうか。それは消費税増税のメリットを国民が身をもって感じるができるかどうかだと思う。

世界一幸せな国と言われているデンマークでは消費税率はなんと25%だ。しかし、この数字に国民は納得し、満足した生活を送っている。これはどうしてなのかを調べてみた。

デンマークの国民の生活は国の責任のもと保障されている。教育費、医療費は全て無料であり、65歳以上になると掛け金なしで年金がもらえ、失業手当制度も充実している。その税金を何に、いくら、どう使われたかが国民に分かるように示されている。このように、税金が

国民のために社会保障として返ってきている。

また世界でも、消費税が高くても社会福祉が充実している国が多い。

今の日本はどうだろうか。私は今の日本国民は増税に従い、ただ税金を納めているだけなのではないかと思う。日本の政府は、増えた税収を社会保障費に充てることにしているが、それを国民に分かるようにしなければ、消費税増税に対する国民の不満は増すばかりではないだろうか。少子高齢化の進む日本が抱える問題は多い。しかし、だからこそ国民が納得のいく政策をとった上で国民と国家が力を合わせ、協力する必要があるのではないか。私は、これらの国の政策が全て日本に合っているとは思わないし、日本の政府が全て実行すべきだとは思わないが、世界の国々のように日本の政府も国民一人一人のことをもっと考えるべきだと思う。そうすれば、国民が国家を信頼し、日本全体で協力し合えると思う。消費税増税が、国民の大きな幸せに繋がる日がくることを願いたい。

伊丹市教育委員会の講評

一般的に言われていることは、小論文は、何かを論じる小文のことであります。知性、鋭さ、てきぱきとした論理性をアピールします。感受性を自己演出するのではなく、論理的、客観的に社会問題について、分析、判断し、その裏付けを行います。また、型が決まっており、「問題提起」「意見提示」「展開」「結論」（四部構成）か「序論」「本論」「結論」（三部構成）等で書くこととなります。

さてそれでは、小論文部門の優秀賞作品である小野瑞季さんの作品ですが、「序論」で日本の消費税増税に反対します。「本論」では、誰にでも同じ8%の税率をかけると所得の少ない人の負担が大きくなり、格差社会を生み出すことになると述べています。それでは、どのようにすれば国民の不満を少なくできるかですが、2つの方法を根拠をもって論じています。ひとつは、イタリア等で導入されている軽減税率であり、またひとつは、デンマークを例にして、税金が何にどのように使われるかを国民に分かるように説明することが重要であると述べています。

論理的、客観的に論じられている点等は、良いと思います。ただし、どのようにすれば国民の不満を少なくできるかについては、よく読めば2つあるとわかるのですが、「本論」がごちゃごちゃ書かれている気がします。最初に、「2つあります。ひとつは…です。またひとつは…です。」と書いてはどうでしょうか。また、2つ目の方は、段落の使い方に気をつけてはどうでしょうか。そして、「結論」の段落で、再度2つの説明を簡単にし、こうすれば良くなると述べてはいかがでしょうか。今後、型の使い方を気にとめて書くようにすればもっといい文章が書けると思います。

現代社会では、自分で問題を見つけ、現実を読みとり、未来を予測し、分析し、論理的に思索し、それを発表して人と議論することが求められています。そのような能力は、まさに書くことによって得られます。また、書くことによって、自分のアイデンティティを拡大することにも繋がります。今後の若者に大いに期待したいと思います。

【ショートショート部門講評】

ショートショート部門では、文章の内容を「短編小説よりもさらに短い小説。小説としての構成がしっかりしており、話の展開に意外性のある文章」と定義しました。この定義に基づき、「ストーリー構成」「伏線とオチ」「描写力」「作文力」「オリジナリティ」の5つの観点から審査を行いました。これらの観点の中で、今回ポイントとなったのは「伏線とオチ」です。ショートショートの醍醐味は、読者を驚かせたり、はっと思わせたりするようなオチがあることではないでしょうか。単なる「お話」にとどまらず、どこかにひねりを加えていたり、風刺をきかせていたりするような作品をコンテストの入賞作品には求めました。もちろん、その前提として、ストーリー構成がしっかりできていることも重要です。情景描写、心理描写などの言葉遣いの秀逸さなども評価しました。

最優秀賞の世木田さんの作品は、総合点で他の作品よりも群を抜いており、とりわけ「描写力」と「作文力」において高い評価を獲得しました。作品の中では、家族で過ごす年越しの様子を「僕」の視

ショートショート部門

最優秀賞

「35 回目の年越し」

世木田夏芽さん（関西大学第一高校1年）

優秀賞

「人生ゲーム」

寺田汐里さん（伊丹市立伊丹高校2年）

「ぼっち」

北岡滉真さん（関西大学第一高校1年）

点から描いています。その丁寧な描写は、読んでいる者にも年越しの家族団らんが容易に想像できるほどでした。さらに、物語の終盤では「僕」の現在の状況が明かされました。オチはいささか予想できる展開ではありましたが、オチへと向かう全体のストーリー構成は秀逸でした。くわえて、読後にあったかい気持ちにさせられるような会話文のやり取りや不思議と切なさも残る言葉選びのセンスを評価し、最優秀賞としました。

優秀賞の寺田さんの作品は、審査の各観点においてバランスよく高い評価を得ました。スマートフォンのアプリを題材に話が展開されており、高校生にとっても、そして大人にとっても親しみのあるテーマで話が進められていました。自分が頼りきっていたスマートフォンの便利さからしっぺ返しをくらうという

流れはややオリジナリティに欠けるという見方もできますが、その便利さに頼りすぎてしまうと…という風刺がきいており、現代人への警鐘ともとれるメッセージ性を高く評価しました。

優秀賞の北岡さんの作品は、「フルーツバスケット」という懐かしい遊びを用いたところなど、作者が高校生であることならではのオリジナリティを感じました。その一方で、情景や心理の描写にかかわる言葉遣いや表現にはまだまだ工夫の余地があります。オチのインパクトは入賞作品の中で最も大きく、高い評価を得ました。どうぞお幸せに！

では、入賞作品と喜びの声、および伊丹市教育委員会よりいただきました各作品に対する講評をご覧ください。

【ショートショート部門最優秀賞】

35 回目の年越し

関西大学第一学校1年 世木田夏芽

僕は大晦日が大好きだ。年末の慌ただしい雰囲気も落ちつき、家族と共にゆっくり過ごす、この日が。地方に出て行った一人娘も、毎日一生懸命娘たちのために働いてくれる旦那さんも、なかなか会えない孫も、みんなに会える。そしてなにより、文江さんの美味しいご飯が食べられる。文江さんのご飯はいつも美味しいが、大晦日は格別だ。家族みんなが集まっているからだろうか。いつもより温かい味がする。

大晦日のご飯はお節と茶碗蒸しとすき焼きだ。これは僕たちが結婚した頃から変わらない。動くことのできない僕の前に娘たちが次々とご飯を取り分けて置いてくれる。

「おじいちゃん、ご飯だよ。」

まだ舌足らずな物言いで僕の前に茶碗蒸しを置いてくれたのは幼い3歳の孫。

「僕がすき焼きが好きなのは、おじいちゃんに似たんだね。」

世木田さんの喜びの声

今回このような賞を受賞することができ、驚きと喜びが隠せません。この作品は母方の祖父母の家で、毎年変わらず行う大晦日の様子を題材にしました。私の体験も少し交え、想像を膨らませながら、思うままに書いたものです。一番初めに思いついたのは結末で、その結末を中心に物語を考えました。結末は絶対に変えたくなかったので、その為大変悩んだところもたくさんありましたが、とても楽しく書かせていただきました。小説を書いたのは初めてで、何分不慣れで読みにくいと思いますが、多くの方に読んでいただける機会を設けていただけたこと、大変嬉しく思います。最後になりましたが、このような拙い作品に目を通して下さったたくさんの方に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

僕の前にすき焼きを置きながら微笑んだのは今年小学校2年生になった8歳の孫。

「お義父さん、今日は奮発して、これ、買って来たんです。」

有名な日本酒を僕の前に置いて、その日本酒の説明をしているのは娘の旦那さん。

「お父さん、今年も少しだけ、私だけで作ったものが入ってるの。お母さんの料理じゃなくて、ごめんなさいね。」

僕の前にお節を置いて笑いながら言ったのは文江さんに似ている娘。

「それじゃあ食べましょうか。」

文江さんの言葉に孫たちが声をそろえて、「いただきます。」と手をあわせた。それに続いて文江さんも手をあわせる。

僕も食べよう。

久しぶりのお節はとても美味しくて、孫たちの嬉しそうな顔を見るともっと美味しくなる。

文江さんがいて、娘がいて、娘の旦那さんがいて、孫がいる。僕は幸せをかみしめるように、静かにみんなを見ていた。「あなた。」

みんなが寝静まった頃、文江さんが僕に話しかける。これは毎年のことで、文江さんは僕の前に座った。

「ご飯、美味しかったですよ。」

はい、美味しかったです。

「今日の栗きんとんは、文乃が一人で作ったんですよ。あの料理の苦手な娘が頑張ったと思いませんか。」

そうだったんですね。どうりでいつもより甘いわけだ。

「私が初めて出した栗きんとんも、こんな味でしたっけ。」

言われてみれば。そうだったかもしれませんね。

「私の料理は上達しましたか。」

ええ、もちろん。昔から世界で一番美味しいのは文江さんの料理です。

文江さんが笑いながら言った言葉に

少し恥ずかしくなる。そうか、もう文江さんと結婚して随分経つんだ。彼女の皺の増えた顔を見て、そんなことを考える。

「寒くないですか。恐くないですか。一人で寂しくないですか。」

ああ、文江さん、泣かないで。

「あなたを一人にしてごめんなさい。」

それは、僕のほうです。

「あなたのいない年が、36回目を迎えようとしています。」

文江さん。

彼女の涙を拭おうとのぼした右手は、彼女の頬を擦り抜け、行き場を無くした。

彼女の流した涙を拭えないのは、これで35回目だ。

「明けましておめでとうございます。今年も、よろしくお祈りします。」

僕は今年もまた、彼女の涙を拭うことはできないのだろう。

伊丹市教育委員会からの講評

お正月を迎える日本の原風景。文章のあちこちから温かさが感じられます。何の変哲もないそんな風景が、最後に胸を詰まらせる光景に変わる展開は、オーソドックスですがやはり熱いものが込み上げます。惜しかったのは、「文江さん」と「僕」の会話の表記に徹底がほしかったことです。そして最後の展開でのテンポの変化。もう少しテンポを上げてよかったのではないのでしょうか。ただ、全体を貫く優しく温かい表現に拍手。

【ショートショート部門優秀賞】 人生ゲーム

伊丹市立伊丹高校2年 寺田汐里

人生にはいくつもの選択肢がある。どこへ行くか、何を食べるか…挙げてみればきりが無い。優柔不断な人からすれば、人生は迷うことばかりだ。

そこで登場したのが『人生ゲームアプリ』。

ルールは普通の人生ゲームと同じ。何かに迷ったときにアプリを起動し、画面中央にあるサイコロに触れれば目の数が出てその分だけマスを進める。そして止まったところに書いてあることを行えばいい、ただそれだけだ。至って『普通』の人生ゲームと同じである…。

雅樹は悩んでいた。大きな俵型のハンバーグに乗っているA定食か、炒飯、ラーメン、餃子と中華三味のB定食か。

ハンバーグもラーメンも雅樹の好物だ。やっと自分の番が回ってきたのに決められない。後ろから冷たい視線が雅樹に振りかかる。早くしないと…どうしよう…そうだ…!

雅樹はポケットからスマートフォンを取り出した。そして『人生ゲームアプリ』を起動させた。

高校生からスマホを使っている雅樹は全てをこのアプリに頼ってきた。

この大学に入学したのだから、アプリ

寺田さんの喜びの声

まさか自分の作品が入賞するとは思いませんでしたので、本当に嬉しいです。実は、小学生の頃から小説を書くのが好きでよく友達に見せていました。「面白い」と言われるのが嬉しくて、次はどんな話を書こうかな。といつも考えていました。中学校に上がってからは部活動等で時間がなくなり、いつの間にか小説を書かなくなっていました。なので、今回この話を書いている時、なんだか懐かしい気持ちになりました。

いつかコンピューターが人間を追い越す日がくるという話を聞いたことがあります。世の中が便利になって、知りたいことはすぐ調べられる時代になりました。私たちは自分で考えるという行為をだんだん失くなるのではないかと考え、この話が思い浮かびました。私自身も優柔不断な性格なのですが、この主人公のように道具に頼って人生を台無しにしない、芯を持った大人になりたいです。

が決めたからだ。

慣れた手つきでサイコロにタップする。

クルクル…ポンッ

出た数は2。止まったマスにはB定食の文字があった。

よし、今日はB定食だ!

雅樹の生活にアプリは必要不可欠な存在になっていた。

それから雅樹はアプリを使い続けた。就職先、結婚のこと、子供の進学先…

アプリの通りに行えば全てが良い方向に進むのだ。

ある日、少し頭痛がした雅樹は病院に行くかどうか迷っていた。

「アプリに聞か…。」クルクル…ポンッ

病院に行くことにした。

「これは…少し危険な状態かもしれないですね。」そう医師から告げられた。

「どうしよう…入院した方が良いのかな…。」

迷った雅樹はアプリを起動した。

クルクルクルクルクル…

いつもよりサイコロの回転数が多い…。

ポンッ。無機質な音が鳴った。

「な…んだ、これ…。」

そこには「ふりだしに戻る」と書いてあった。

ふりだして…まさか…?

そこに雅樹の姿はもうなかった。

…あるところに1人の男の子が生まれた。名前は雅樹と名付けられた。

伊丹市教育委員会からの講評

誰も、迷ったとき、誰かが決めてくれたらいいのにと思ったことがあるはず。そんな心の隙間にすーっと入り込んでくる作品。

若者のスマホ依存が問題化している今の時代、話題の着眼点も抜群です。「人生ゲームアプリ」なるものに、安易に選択をゆだねる主人公、アプリへの依存はどんどん増し、最後には…。ブラックな結末を簡潔な書きぶりで、さらり、すんとオチをつけるあたりが見事。ショートショートの長所や魅力が十分生かされた作品です。

【ショートショート部門優秀賞】 ぼっち

関西大学第一高校1年 北岡滉真

僕はずっと一人でいる。学校にいる時も、家にいる時も、帰る時でさえ一人だ。何をするとしても一人でしようとする。そんな僕をみかねた先生は僕を呼び出した。

「何でお前はいつも一人でいるんだ？」

と、いかにも平凡なことを聞いてきた。

「僕は一人でいるのが好きだし、友達という名の裏切られる存在が嫌だからです。」

僕は思っていたことを素直に話した。

「それでも、一人でいるといじめられているように見えるんだが…。いじめられていないんだよね？」

と、不安そうに尋ねる先生がそこにはいた。

「まあ、いじめられてはいないです。でも、クラスの奴らを見ていると吐き気をおぼえることはあります。いつかは裏切られる存在と仲良くして、心の中では何を考えているかわからない奴と帰りながら楽しく話している奴らがバカすぎてすげえね。」

笑顔で先生の質問に答えた。すると先生はあきれかえったように言うのだった。

「そうか。わかった。それならいい。今日は帰っていいぞ。」

と、言うのだった。でも、僕はみてしまったのだ、言った直後に口をニヤつか

北岡さんの喜びの声

僕はこういった賞をとったことがなかったので、初めて名前を呼ばれた時、とてもうれしかったと共に、驚きました。今でも驚いているので、何かの間違いだと思ってしまいます。作文となると、国語力が試されて、必要だと思っているので、今回の作文を書いている最中も「作文の宿題は考えずに自分が思う風にかけて想像できるから楽しいな。まあ、賞はとることができへんけどー。」って、思いながら書きました。でも、こう思いながら書いた作文が賞をとって本当にうれしいです。実は、今「喜びの声」と言うコメントを書いている最中なのですが、何を書いたらいいのかも分からず、恥ずかししながら、発想力のなさに嘆いています。このコメントを読んで下さった人にお願ひがあります。自分は国語はできないからどうでもいいと思うのではなく、作文ならチャンスはあるかも！ と思い、一生懸命頑張っていきたいと思います！ 読んで頂き、ありがとうございました。

せていたことを。でも、僕はどうでもいいことだと思い、職員室から出て、家にかえった。家にかえると、自分の部屋に行き、メールをするのが日課だ。同じクラスの幼馴染がメールをしてくるのだ。メールではいっぱい話しているが、学校では話さない。そして、友達ではない。メールのやりとりをしていると、今日の一日も終わった。

翌日の6限目はHRだった。何をするとしたら、先生がチラッとこちらを見て口を開いた。

「今日はみんなで、フルーツバスケットをしよう。」

僕は先生の言った言葉で思い出したのだ。昨日、口をニヤつかせているところを。僕は意図がわかった瞬間、先生をにらんだ。そして、準備がされている中、珍しく幼馴染が話しかけてきた。

「何で先生をにらんでいたの？」

見られていたことに少し驚いた。

「なんとなくだよ。なんとなく。」

そういうと、幼馴染はクスクス笑った。そして、見ていた先生もニヤついていた。それを見た僕はムカツとしたのだった。

時がすぎて、フルーツバスケットが行われた。順調に事が進められて、最後に先生が真ん中になった。先生はまた、ニヤツとしてこっちを向いた。僕は心の中で何コイツ、イジメかよ！ と思っていると先生が口を開いた。

「友達がいる人！」

みんなは動いたが、僕だけは動かなかった。僕の隣に幼馴染がきた。先生は不思議そうに目でうったえていた。幼馴染と友達ではないのかと、そんな先生を見ていた幼馴染も目を合わせ、二人でクスクス笑いながら目でいったのだ。

『僕（私）達は友達じゃなくて、恋人だもんな（ね）。』と。

伊丹市教育委員会からの講評

題名がおもしろい。「ぼっち」を辞書で調べてみると「ひとりぼっち」などの語尾の「だけ」とか「ばかり」の他、「突起、突き出た部分」という意味が載っています。一人の人物の個性を輝かせようとする作者の意図が想像されます。小説の魅力は様々ですが、一つには世界観があります。今作では、「いじめ」をテーマにラストの「恋人」というオチにつなげています。表情の描写から、様々な人物像を想像させる作者の描写力、観察力に、今後の作品も読んでみたいと期待が高まります。

応募して下さった生徒のみなさんにご指導くださった先生方には、心より感謝を申し上げます。文章を書くということは、決して楽なことではありません。その「生みの苦しみ」を乗り越え、時間をかけて作品を完成させてくださりありがとうございました。みなさんの力作を読むことができまして、審査員一同、心よりうれしく思っております。

今年度は講評で「剽窃」の問題を指摘しました。小論文部門だけでなく、ショートショート部門においても、インターネット上の作品を模した応募作品が複数あり、審査員として大変残念な気持ちになりました。同時に、高校生のみなさんにも剽窃の重大さを伝え、文献を引用する際の作法を習得してもらうことが課題であると再認識しました。自分が書いたものを他者に発信することには責任が伴います。その責任について、これを機にみなさんが意識を高めてくださることを審査員一同願っております。また、先生方からも改めて文章を書くうえでのマナー・ルールについて、ご指導くださいましたら幸甚に存じます。

最後に、入賞作品の掲載にあたっては、作者の意思を尊重し、こちらでの編集は最低限にとどめさせていただきます。掲載した文章は、ほぼ原文通りであることを申し添えておきます。

平成 26 年度「考動力」作文コンテスト審査員

田中俊也 (教育開発支援センター・センター長、文学部教授)
中澤 務 (本取組責任者、文学部教授)
岩崎千晶 (教育推進部助教)
小林至道 (教育推進部特別任用助教)
毛利美穂 (教育推進部特別任用助教)
西浦真喜子 (教育推進部特別任用助教)
林田定男 (神戸市立工業高等専門学校講師、教育開発支援センター研究員)
佐々木知彦 (教育開発支援センター研究員)
仁村万喜子 (学事局授業支援グループ)
竹中喜一 (学事局授業支援グループ)
宮田 将 (学事局授業支援グループ)

ライティングラボ TA

上田一紀
内田龍之介
王 輯予
小田直寿
狩野博美
黒澤 暁
小林祐也
阪口紗季
施 燕
塩見 翔
園田恵梨果
中野裕史
西川一二
抽冬紘和
日並彩乃
廣瀬有哉
福永健一
松岡隼平
松元 圭
村田 開
森 瑠偉
山田和哉
吉田由似
吉崎雅基
米村恵吾
渡邊朋希

平成 26 年度「考動力」作文コンテスト・高校生の部・表彰式の様子

平成 27 年 3 月 25 日（水）、関西大学千里山キャンパス第 1 学舎 1 号館 5 階のライティングラボ 1 にて、「考動力」作文コンテストの表彰式を行いました。入賞者のみなさん、高校の先生方にお忙しい中ご参列いただきました。誠にありがとうございます。

表彰式は、関西大学教育開発支援センター・センター長の田中俊也教授による表彰状と賞品の授与、祝辞、伊丹市教育委員会からの講評の紹介と進み、最後に全員で記念撮影をして閉会となりました。

田中教授は、まず、入賞者一人ひとりに向けて作品の講評を述べられました。さらに、大学での学びと高校までの学びは違うことに触れながら、入賞者の方々の未来はいくつもの可能性を秘めた輝かしいものであるとのお祝いの言葉を贈られました。入賞者のみなさんは、田中教授が祝辞に交えた冗談に笑顔を見せつつ、たいへん熱心に聞いておられました。



表彰式の様子は、関西大学のホームページのトップページ・トピックスにも掲載されました。
(http://www.kansai-u.ac.jp/mt/archives/2015/03/post_1347.html)



入賞者のみなさん、
おめでとうございます！



関西大学教育推進部・ライティングラボ
〒564-0073 大阪府吹田市山手町 3-3-35 関西大学第 1 学舎 1 号館 5・6 階
[Tel] 06-6368-1411 [E-mail] wlabo@ml.kandai.jp
[URL] <http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/>